

実務ワークショップ報告

平成 26 年度実務ワークショップ 「微生物管理における学名に関する問題点」

日本微生物資源学会実務担当小委員会

永井利郎

(独立行政法人農業生物資源研究所遺伝資源センター (MAFF))

坂本光央

(独立行政法人理化学研究所バイオリソースセンター (JCM))

伴さやか

(独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター (NBRC))

林 将大

(岐阜大学生命科学総合研究支援センター嫌気性菌研究分野)

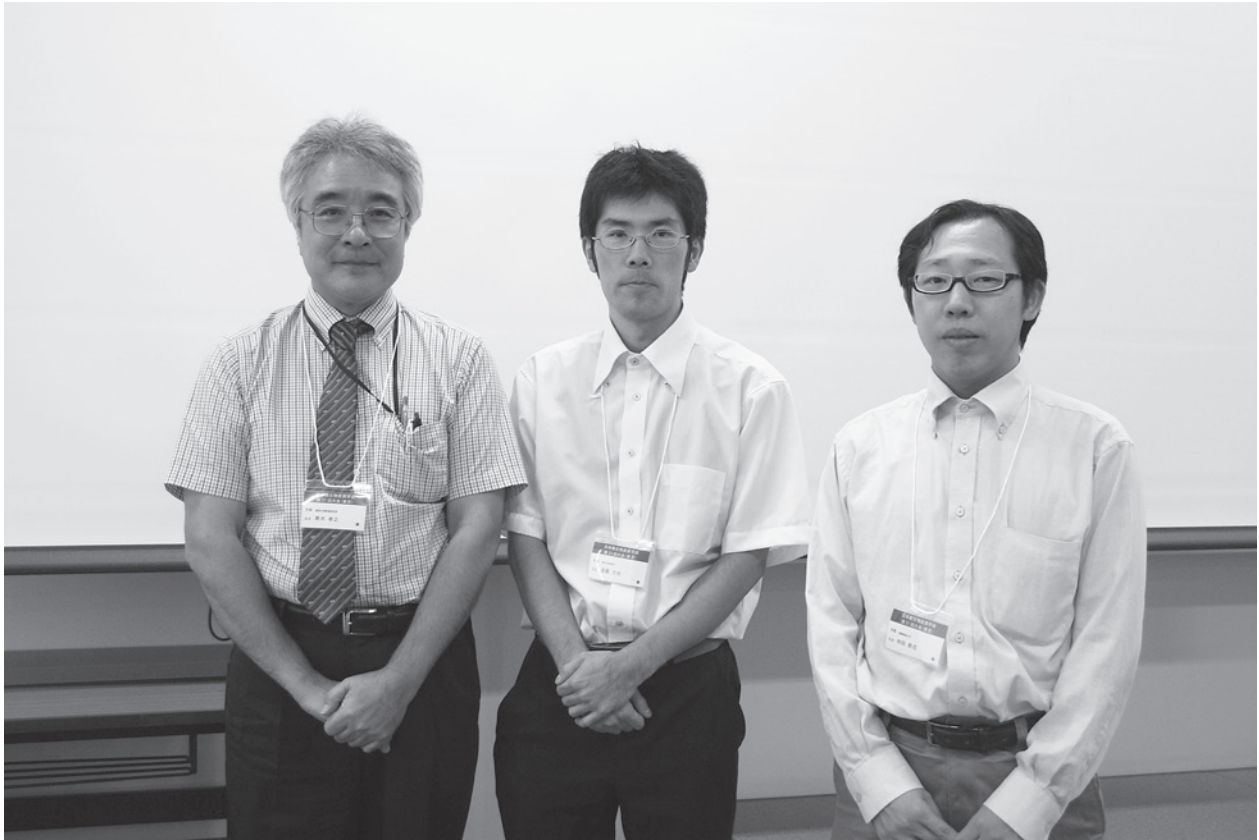
森 史

(独立行政法人国立環境研究所微生物系統保存施設 (NIES))

微生物を取り扱う際、一番の指標となるものは学名であり、その学名が付けられた微生物はいずれも分類学的に同一の生物であることを示すものである。学問的にはもちろんのこと、特に病原菌については法律（感染症法、家畜伝染病予防法、植物防疫法など）上も学名は非常に重要である。参加された方の中には実際にそれら法律にかかる微生物株を輸入するときに経験されたかと思う。しかし、その学名は普遍的なものではなく、科学の進歩とともに変遷をたどってきたものが多い。また、真菌類においては、生活環（テレオモルフとアナモルフ）の違いにより同一種に2種類の学名が付けられてきた経緯がある。特徴の違いにより同じ種に別の学名が付けられるのも少なくはなく、同時に学名の統合も行われ整理されてきた。また、カルチャーコレクションとしては極力避けなければならないことであるが、誤同定により別の学名が付けられてしまうこともある。すなわち、それぞれの微生物株は、歴史の流れの中で複数の学名をもってきたということであり、そのことが原因で、カルチャーコレクションの業務遂行において少なからぬ混乱があった。

今回の実務ワークショップでは、これまで直接にはテーマとして取り上げられてこなかった「学名」に焦点をあて、学名にまつわる問題点について、その周辺の状況も含めて3名の先生方に解説して頂いた。

詳細は演者の先生方がまとめられた後述の解説をご覧頂きたい。ポイントを簡単にまとめると、タイプの話（図解をタイプとしてなされた新種記載の問題点：研究者により図解のディテールが異なり、それが同定を難しくしているなど）、真菌類における2重命名法の廃止に関する話題、「ゴミ箱」フォルダー化した学名の再分類、さらにはこれらの問題についてカルチャーコレクションとしてどう対応していかなければならないのかの提言、ということになろうかと思う。内容も濃く、専門性も高い話題の上、質問なども積極的になされたため、いささか時間が足りなかったのは今後のワークショップ企画の課題としたい。また、最後に触れられたカルチャーコレクションとしての今後の対応については、非常に大きな実務的な課題である。これについてはいずれ実務ワークショップで本格的に取り組みたいテーマである。



左より、青木孝之先生（MAFF）、遠藤力也先生（JCM）、仲田崇志先生（慶應義塾大学）

末筆ではあるが、最後に快くご講演を引き受けてくださった先生方、そして本ワークショップに参加された皆様に委員一同謝意を表したい。

注：実務ワークショップはカルチャーコレクションの実務担当者へ情報提供などを行うことを目的として企画され、文書管理・情報管理・品質管理・コンプライアンスなどもテーマとして取り扱っています。2011年より大会当日に開催されるようになりました。

概要

大会名：日本微生物資源学会第21回大会

日 時：2014年9月3日（水）9：30-11：00

場 所：東京都世田谷区・東京農業大学世田谷キャンパス1号館531教室

9：30-10：00 演題1：真菌類の二重命名法の廃止に伴う学名統一議論の動向～いもち病菌等を例に～
青木孝之（MAFF）

10：00-10：30 演題2：微細藻類の学名のタイプをめぐる諸問題 仲田崇志（慶應義塾大学）

10：30-11：00 演題3：*Candida*属とは何か？～命名法改訂がもたらす酵母学名の再編～
遠藤力也（JCM）（敬称略）